

## 2022年12月の地震活動の評価（案）

## 1. 主な地震活動

目立った活動はなかった。

## 2. 各領域別の地震活動

## (1) 北海道地方

目立った活動はなかった。

## (2) 東北地方

目立った活動はなかった。

## (3) 関東・中部地方

- 2018年頃から地震回数が増加傾向にあった石川県能登地方の地殻内では、2020年12月から地震活動が活発になっており、2021年7月頃からさらに活発になっている。2022年12月以降も、12月9日にマグニチュード(M)4.1の地震、12月18日に活動域の西端付近でM3.9の地震、2023年1月6日に震度4を観測したM4.5の地震が発生するなど、一連の地震活動は、現在のところ減衰する傾向は見え、依然として活発な状態が継続している。なお、2022年11月に観測されたこれまでの活動域よりも南東側のややまとまった浅い地震活動は、12月にはみられていない。

これまでの最大の地震は、2022年6月19日に発生したM5.4の地震である。この他、2021年9月16日にM5.1の地震、2022年6月20日にM5.0の地震が発生した。2020年12月1日から2023年1月12日08時までに震度1以上を観測する地震が269回、このうち震度3以上を観測する地震が40回発生した。2022年12月1日から2023年1月12日08時までに震度1以上を観測する地震が17回、このうち震度3以上を観測する地震が4回発生した。

GNS観測の結果によると、2020年12月頃から、石川県珠洲(すず)市の珠洲観測点で南南東に累積で1cmを超える移動及び4cm程度の隆起、能登町の能都(のと)観測点で南南西に累積で1cmを超える移動が見られるなど、地殻変動が継続している。

これまでの地震活動及び地殻変動の状況を踏まえると、一連の地震活動は当分続くと考えられるので強い揺れに注意が必要である。

- 12月19日に千葉県北東部(\*)の深さ約25kmでM4.1の地震が発生した。この地震の発震機構は北北西-南南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。

## (4) 近畿・中国・四国地方

目立った活動はなかった。

#### (5) 九州・沖縄地方

- 12月13日に奄美大島近海の深さ約20km（CMT解による）でM6.0の地震が発生した。この地震の発震機構は東西方向に圧力軸を持つ型であった。
- 12月18日に日向灘の深さ約35kmでM5.4の地震が発生した。この地震の発震機構は北西－南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。

#### (6) 南海トラフ周辺

- 南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。

#### 補足（1月1日以降の地震活動）

- 1月3日に岩手県沖の深さ約35kmでM5.1の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。

\*：気象庁が情報発表で用いた震央地域名は「千葉県東方沖」である。

注：GNSSとは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般をしめす呼称である。

## 2022年12月の地震活動の評価についての補足説明

令和5年1月13日  
地震調査委員会

### 1. 主な地震活動について

2022年12月の日本及びその周辺域におけるマグニチュード(M)別の地震の発生状況は以下のとおり。

M4.0以上及びM5.0以上の地震の発生は、それぞれ77回(11月は99回)及び10回(11月は13回)であった。また、M6.0以上の地震の発生は1回(11月は1回)であった。

- (参考) M4.0以上の月回数81回(69-104回)  
(1998-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)  
M5.0以上の月回数10回(7-14回)  
(1973-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)  
M6.0以上の月回数1回(0-2回)  
(1919-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)  
M6.0以上の年回数16回(12-21回)  
(1919-2017年の年回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)

2021年12月以降2022年11月末までの間、主な地震活動として評価文に取り上げたものは次のものがあつた。

- |              |             |                         |
|--------------|-------------|-------------------------|
| — 山梨県東部・富士五湖 | 2021年12月3日  | M4.8(深さ約20km)           |
| — 紀伊水道       | 2021年12月3日  | M5.4(深さ約20km)           |
| — トカラ列島近海    | 2021年12月9日  | M6.1                    |
| — 父島近海       | 2022年1月4日   | M6.1(深さ約60km)           |
| — 日向灘        | 2022年1月22日  | M6.6(深さ約45km)           |
| — 福島県沖       | 2022年3月16日  | M7.4(深さ約55km)           |
| — 岩手県沖       | 2022年3月18日  | M5.6(深さ約20km)           |
| — 茨城県北部      | 2022年4月19日  | M5.4(深さ約95km)           |
| — 茨城県沖       | 2022年5月22日  | M6.0(深さ約5km)            |
| — 石川県能登地方    | 2022年6月19日  | M5.4(深さ約15km)           |
| — 熊本県熊本地方    | 2022年6月26日  | M4.7(深さ約10km)           |
| — 上川地方北部     | 2022年8月11日  | M5.4(深さ約5km)、M5.2(ごく浅い) |
| — 大隅半島東方沖    | 2022年10月2日  | M5.9(深さ約30km)           |
| — 福島県沖       | 2022年10月21日 | M5.0(深さ約30km)           |
| — 茨城県南部      | 2022年11月9日  | M4.9(深さ約50km)           |

### 2. 各領域別の地震活動

#### (1) 北海道地方

北海道地方では特に補足する事項はない。

#### (2) 東北地方

東北地方では特に補足する事項はない。

(3) 関東・中部地方

関東・中部地方では特に補足する事項はない。

(4) 近畿・中国・四国地方

ー G N S S 観測によると、2019 年春頃から四国中部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、四国中部周辺のフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。

(5) 九州・沖縄地方

九州・沖縄地方では特に補足する事項はない。

(6) 南海トラフ周辺

ー「南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。」：

(なお、これは、1月11日に開催された定例の南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会における見解(参考参照)と同様である。)

(参考) 南海トラフ地震関連解説情報についてー最近の南海トラフ周辺の地殻活動ー(令和5年1月11日気象庁地震火山部)

「現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時(注)と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

(注) 南海トラフ沿いの大規模地震(M8からM9クラス)は、「平常時」においても今後30年以内に発生する確率が70から80%であり、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から既に70年以上が経過していることから切迫性の高い状態です。

1. 地震の観測状況

(顕著な地震活動に関する現象)

12月18日03時06分に日向灘の深さ34kmを震源とするM5.4の地震が発生しました。この地震は、発震機構が北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生しました。

(ゆっくりすべりに関係する現象)

プレート境界付近を震源とする深部低周波地震(微動)のうち、主なものは以下のとおりです。

(1) 紀伊半島北部：12月12日から22日

(2) 紀伊半島西部：12月30日から31日

2. 地殻変動の観測状況

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)、(2)の深部低周波地震(微動)とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しました。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られています。

G N S S 観測によると、2019年春頃から四国中部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されています。

(長期的な地殻変動)

G N S S 観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

### 3. 地殻活動の評価

(顕著な地震活動に関する現象)

12月18日に発生した日向灘の地震は、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した地震で、その規模から南海トラフ沿いのプレート間の固着状態の特段の変化を示すものではないと考えられます。

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)、(2)の深部低周波地震(微動)と地殻変動は、想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。

2019年春頃からの四国中部の地殻変動は、四国中部周辺のプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。

これらの深部低周波地震(微動)、短期的ゆっくりすべり、及び長期的ゆっくりすべりは、それぞれ、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。

(長期的な地殻変動)

御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺で見られる長期的な沈降傾向はフィリピン海プレートの沈み込みに伴うもので、その傾向に大きな変化はありません。

上記観測結果を総合的に判断すると、南海トラフ地震の想定震源域ではプレート境界の固着状況に特段の変化を示すようなデータは得られておらず、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。」

- |     |  |
|-----|--|
| 参考1 | 「地震活動の評価」において掲載する地震活動の目安<br>①M6.0以上または最大震度が4以上のもの。②内陸M4.5以上かつ最大震度が3以上のもの。<br>③海域M5.0以上かつ最大震度が3以上のもの。   |
| 参考2 | 「地震活動の評価についての補足説明」の記述の目安<br>1 「地震活動の評価」に記述された地震活動に係わる参考事項。<br>2 「主な地震活動」として記述された地震活動(一年程度以内)に関連する活動。<br>3 評価作業をしたものの、活動が顕著でなく、かつ、通常の活動の範囲内であることから、「地震活動の評価」に記述しなかった活動の状況。<br>4 一連でM6.0以上が推定されたゆっくりすべりとそれに伴って発生した低周波地震(微動)。 |